

近世期クエーカー派の女性運動家たち

——サーバントリーダーの群像——

踊 共 二

はじめに

現代のリーダーシップ論はビジネスの領域をおもな研究対象としているが、興味深いことに少ないながら宗教研究の分野に関係するものもある。ロバート・グリーンリーフの名著『サーバントリーダーシップ』（1977年初版）には「教会におけるリーダーシップ」の章があり、17世紀なかばに生まれたクエーカー派の始祖ジョージ・フォックスに関する記述がかなり多く含まれている。このことは宗教の役割がいまも大きいアメリカ社会のあり方を反映しているといえるであろう¹。そもそもグリーンリーフはクエーカー教徒であり、その信仰と社会倫理が彼のリーダーシップ理論の根幹をなしている。このことは彼の以下のような主張からよく理解できよう。

組織に属している人は誰でもリーダーであり、フォロワーでもあるのです。[・・・] 生まれつきサーバントの素質を持つ人に、人を導く権限が与えられるべきです。[・・・] そうした人々は、他人がより健康で賢くなるように、自由になれるように手助けしたいと願い、自分たち自身もサーバントになりたいと思います。サーバントとは、社会でもっとも恵まれない人が

¹ ロバート・K・グリーンリーフ『サーバントリーダーシップ』金井壽宏・金井真弓訳（英治出版2008年）、351～398頁。2000年代にはオーストラリアのセン・センジャヤが宗教の領域における「スピリチュアルなリーダーシップ」について考察するなかでグリーンリーフのサーバントリーダー論に触れ、その最初の実践者はイエス・キリストであると述べている。キリストはいわゆる最後の晩餐のとき、たらいの水で弟子たちの足を洗い、「師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである」と語ったのだが（ヨハネ福音書13章）、ここにはリーダーはつねに奉仕者でなければならないという思想が表現されているというのである。Cf. Sen Sendjaya and James C. Sarros, *Servant Leadership. Its Origin, Development, and Application in Organizations*, in: *Journal of Leadership & Organizational Studies* 9 (2002), 57-64. 最近では、やはりキリスト教学の立場でリーダーシップを論じるアメリカのデーヴィッド・クックらがドイツの宗教改革者マルティン・ルターに「適応型」「変革型」「サーバント型」などのリーダー像を適用している。David Cook, ed., *Luther on Leadership. Leadership Insights from the Great Reformer*, Eugene, Oregon, 2017. こうしたリーダーシップの宗教史的研究においては女性のリーダーたちも注目されており、オーストラリアのドロシー・リーは新約聖書に登場する「ガリラヤの女たち」（マグダラのマリアなど）を「奉仕者」にして「宣教者」と位置づけている。彼女は古代のキリスト教会には「教父」（Church Fathers）だけでなく「教母」（Church Mothers）と呼ぶべきリーダーたちがいたとも論じている。たとえば3世紀の殉教者ベルベトゥアとフェリキタスである。Dorothy A. Lee, *The Ministry of Women in the New Testament. Reclaiming the Biblical Vision for Church Leadership*, Grand Rapids, Michigan, 2021, 15-35, 153-170.

利益を得るか、少なくともそれ以上奪われることがないという公正さの理論に従って運営を行います²。

グリーンリーフは「人生とは奉仕と貢献であり、まわりの人々の安全や満足感に気を配ること」だと述べ、ガンジーの言葉を引きながら「人格なき学識」や「道徳なきビジネス」を批判している。またすぐれたリーダーには根気強い「説得」の力が必要だと論じ、1700年代のアメリカにおいて30年の歳月をかけ、クエーカーの黒人奴隷所有者たちを一人ひとり訪問し、ていねいな説得によって奴隷を解放させる運動を展開した説教者ジョン・ウールマンの例をあげている³。

この異色のリーダーシップ論に従って企業や学校や病院を経営することは本当にできるのか、疑問を呈する論者も多い。それでもこの理論は、その後の「シェアド・リーダーシップ」や「ハンブル・リーダーシップ」「ケアリング・リーダーシップ」などの理論に陰に陽に影響を与えている⁴。「カリスマ型」や「独裁型」のリーダーシップの限界はだれもが理解している。いわゆる「ビジョン型」「変革型」のリーダーシップも「説得」や「調整」を前提とする場合が多い。危機に対応する必要のある医療や看護の世界ではしばしば「決断型」のリーダーシップが求められているが、事前に患者や家族、同僚や部下の信頼と同意が得られていなければ失敗する危険性が高い。もし「決断」する人がつねひごろサーバントリーダーの役割を実践していれば、またいわゆる「シェアド・メンタルモデル」が成立していれば、そうした危険は避けられるであろう⁵。

本稿は、こうしたリーダーシップ研究を念頭に置きながら、グリーンリーフや彼の理論の継承者たちに影響を与えた近世期クエーカー派のサーバントリーダーの実例、つまりサーバントリーダーシップ論の歴史的源流を掘り起こす試みである⁶。とりわけ注目したいのは女性の活動家たちである。女性とリーダーシップをテーマとする研究は発展途上であり、差別と偏見と闘いながらリーダーの役割を果たしてきた女性たちの歴史を意識的にふりかえってリーダーシップ論に組み入れる研究も十分とはいえないからである。このことは欧米についてもアジア・アフリカ等についても同じで

² グリーンリーフ、前掲、『サーバントリーダーシップ』、385、386頁。

³ 同上、23、26、78頁。

⁴ Cf. J. B. Carson, P. E. Tesluk, and J. A. Marrone, Shared Leadership in Teams. An Investigation of Antecedent Conditions and Performance, in: *Academy of Management Journal* 50/5 (2007), 1217-1234; P. G. Svensson, G. J. Jones, Seungmin Kang, The Influence of Servant Leadership on Shared Leadership Development in Sport for Development, in: *Journal of Sport for Development* 10/1 (2021), 17-24. 石川淳『シェアド・リーダーシップ：チーム全員の影響力が職場を強くする』（中央経済社2016年）、エドガー・H・シャイン、ピーター・A・シャイン『謙虚なリーダーシップ』野津智子訳（英治出版2020年）、ヘザー・R・ヤンガー『ケアリング・リーダーシップ』弘瀬友稀訳（アルク2021年）なども参照。

⁵ Rahul K. Shah and Sandip A. Godambe, *Patient Safety and Quality Improvement in Healthcare. A Case-Based Approach*, New York, 2020, 208, 301.

⁶ グリーンリーフセンター（Greenleaf Center for Servant Leadership）の所長を務めたラリー・スピアーズによれば「強制」ではなく「説得」を重んじるグリーンリーフの思想はとくにクエーカー色が濃い。Robert K. Greenleaf, *The Servant Leader Within. A Transformative Path*, ed. by B. Hamilton, J. Beggs, and Larry C. Spears, Mahwah, New Jersey, 2003, 17f.

ある⁷。本稿はサーバントリーダーシップ論の基礎を築いたグリーンリーフの思想的背骨を成す近世のクエーカー主義に焦点をしぼり、この宗教運動においてどのような女性リーダーが育ち、当時の社会に衝撃を与え、後世に影響を残したかを歴史研究の枠組みで具体的に示し、それによって現代のリーダーシップ論をいっそう豊かなものにする材料を提供する試みである。

1. マーガレット・フェルとエリザベス・フートン：社会正義を求めて

クエーカー派は1650年代にジョージ・フォックスが求道の旅の途上、イングランド北部でシーカーと呼ばれるグループに属する女性たちと出会い、彼女たちの預言者的なカリスマに深い感動をおぼえ、活動をともしるなかで形成された。そのためクエーカーは最初から男女の霊的な平等を説いていた⁸。フォックスは女性リーダーのひとりマーガレット・フェルと1669年に結婚したが、そのとき二人はイングランド国教会の定める「結婚の誓い」に出てくる「汝は夫に従い、仕えるか」(Wilt thou obey him, and serve him?)という新婦に対する司式者の問いかけを意図的に省き、対等・平等な関係を築くことを宣言した。そのときフォックスは45歳、フェルは55歳であった⁹。

クエーカーは沈黙のうちにはじまる「集会 Meeting」を開き、だれかが「内なる光 Inward Light」(聖霊)に導かれて語るのを待つ。その語り(証しや説教)はしばしば身体の「震え」を伴った。そのため、この運動を弾圧する側の判事が彼らを「震える人」(クエーカー)と呼び、これが通称となって今日にいたっている。ただし正式名称は「キリスト友会」(The Religious Society of Friends)であり、略称は「フレンド派」である。彼らは当初、専門の聖職者をおかず、「万人祭司主義」を実践していた。そして1671年には女性だけの自律的な集会も開かれるようになる(男女合同の集会も行われた)。マーガレットはそうした時代に「クエーカーの母」と呼ばれ、女性集会の組織、説教、日記や神学的著作の刊行といった活動をリードした。加えて彼女は、貧しい信徒や獄中にある仲間を援助する慈善組織の設立と運営に尽力した。彼女はジェントリ層の出であり、裕

⁷ 女性のリーダーシップを歴史的・現代的かつ理論的に考察した包括的研究として George R. Goethals & Crystal L. Hoyt, *Women and Leadership. History, Theories, and Case Studies*, Great Barrington, Massachusetts, 2017 がある。同書は女性参政権の問題から宗教・カルトの問題まで扱っている。それより先、1990年代に「公式のオーソリティー」をもたない状態の女性たちのリーダーシップの事例を検証しようとしたハイフェッツの業績がある。ハイフェッツはたとえば20世紀前半の産児制限運動家(看護師)マーガレット・サンガーをとりあげている。ロナルド・A・ハイフェッツ『リーダーシップとは何か!』幸田シャーマン訳(産能大学出版部1996年)、289～296、307～317頁を参照。日本の女性リーダー研究については、お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所編『女性リーダー育成のために: グローバ時代のリーダーシップ論』(勁草書房2019年)を参照。同書には「他者」を中心に据える儒教倫理、仏教思想(慈悲)、キリスト教倫理(隣人愛)の問題への言及があり、サーバントリーダーシップ論の紹介も含まれている(13～21頁)。

⁸ マーガレット・H・ベイコン『フェミニズムの母たち: アメリカのクエーカー女性の物語』岩田澄江訳(未來社1993年)、27～30頁。

⁹ Cf. Sheila Wright, "Truly Dear Hearts". *Family And Spirituality In Quaker Women's Writings 1680-1750*, in: *Women, Gender and Radical Religion in Early Modern Europe*, ed. by Sylvia Brown, Leiden/Boston, 2007, 104f. 当時の結婚の誓いについては Samuel L. Bray & Drew N. Keane, eds., *The 1662 Book of Common Prayer: International Edition*, Westmont, Illinois, 2021, 314f を参照。

福であったが、そうした人たちには多額の資金提供が期待されていた¹⁰。



写真1 18世紀に建てられたフィラデルフィアのクエーカー集会所（筆者撮影）

ところで16世紀の宗教改革者とその後継者の大半は教会における女性の公的な役割を認めていなかった¹¹。聖書の教えによれば、人類最初の女性エバはアダムの助け手として造られたが、禁断の木の實をアダムに食べさせることで子々孫々にまで原罪を負わせた。それゆえエバ以後の女性（妻）たちは「弱い器」として夫に服従しなければならない（第1ペテロ3章7節）。またパウロはいう。「女が教えたり、男の上に立ったりすることを、わたしは許さない。むしろ、静かにしているべきである。なぜなら、アダムが先に造られ、それからエバが造られたからである。またアダムは惑わされなかったが、女は惑わされて、あやまちを犯した。しかし、女が憤み深く、信仰と愛と清さを持ち続けるなら、子を産むことによって救われるであろう」と（第1テモテ2章12～15章）。

フォックスはこうした聖書の教えをどのように「克服」したのであろう。彼の日記には次のように書いてある。「しかし使徒は娘たちやはしためたちが預言を行うとも語っている。それは律法の時代にも福音の時代にも行われており、そもそも男と女は墮罪以前、義であり聖である神の像として互いに助け手であった。だからキリスト・イエスによって再生されたのちの男女はふたたびそうなるのである」と¹²。フォックスの神学的思惟によれば、キリストゆえに原罪から解放された人間

¹⁰ Marjon Ames, *Margaret Fell, Letters, and the Making of Quakerism*. London, 2017, 76.

¹¹ Merry E. Wiesner-Hanks, *Women and Gender in Early Modern Europe*, 4th Ed., Cambridge, 2019, 231-277; Sylvia Brown, ed., *Women, Gender, and Radical Religion in Early Modern Europe*, Leiden & Boston, 2007, 1-14.

(男女) はエデンの園にいたアダムとエバがそうであったような対等な助け手としての地位を回復するのである。なおフォックスが参照したのは、「あなたがたのむすこ娘は預言をし、若者たちは幻を見、老人たちは夢を見るであろう。その時には、わたしの男女の僕たちにもわたしの霊を注ごう。そして彼らも預言をするであろう」という使徒行伝2章17、18節にみえる旧約のヨエル書の引用文や、「もはや、ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからである」というガラテヤ書3章28節のパウロの言葉である。聖書は終末的ないし救済論的地平では性差を超えた展望を示している。フォックスに次ぐクエーカーの指導者ウィリアム・ベンも男女の霊的な平等を説き、「性別は重要ではない。というも魂に性別はないからである」という名言を残している¹³。

ところでマーガレット・フェルは説教を行うプリーチャーであり、「イスラエルの母」と呼ばれる女性指導者であったが、遠隔地への巡回説教の任務は若い仲間たちに託していた。そうした女性たちは救貧事業にも力を尽くした。クエーカーは貧しさゆえに十分の一税(教会税)を払うことを拒む貧農たちに支援金を配り、獄中にある信徒仲間を見舞って食料や物資を届けた。マーガレット・フェルを含め、クエーカー女性たちもしばしば投獄されていた。たとえばチェシャーのクエーカー信徒ハリソン夫妻(ジェームズとアン)は1663年に十分の一税未納ゆえに28ポンド18シリング相当の財産を没収され、クエーカーの集会に参加したことを理由に5か月間投獄された。同じく集會参加の罪で1655年に入獄したポット夫妻(トーマスとメアリ)は、1671年に十分の一税未納ゆえに20ポンドの罰金を課された。ところが財産没収のために夫妻の住居に押し入った役人は3ポンド相当の価値しかない家財を奪うことができただけであった¹⁴。クエーカーにはマーガレット・フェルのような裕福なメンバーもいたが、その運動は貧農を含め、あらゆる階層の人たちに広がっていた。なお1659年にリンカンシャーとチェシャーで作成された十分の一税廃止の請願書には約15,000人のクエーカーおよび非クエーカーが署名していたが、そのうち7,746人が女性であったという¹⁵。この事実から知りうるのは、クエーカー派の女性運動家たちは自分たちの組織の維持やメンバーの相互援助のために働いていただけでなく、社会全体に、とりわけ貧しい人たちに奉仕するサー

¹² “But ye Apostle [alsoe] says [y] daughters [&] handemaydes shoulde prophesy which they did both in ye time of ye law & gospell & man & woman was meete helpes before they fell in ye image of God & righteousnesse & holynesse: & soe they are [to bee] againe in ye restoration by Christ Jesus”. Norman Penney, ed., *The Journal of George Fox*, Vol. 2, Short Visit to London (1673), Cambridge, 1911, 263. なおウィリアム・ベンのペンシルヴァニア植民地では当初、奴隷所有が認められており、クエーカーの間でこれが正式に禁じられたのは1780年代のことである。フォックスの主張は絶対視されておらず、多くの問題で論争が起きていた。ベイコン、前掲書、103頁。

¹³ “Sexes make no Difference; since in Souls there is none”. William Penn, *Some Fruits of Solitude, in Reflections and Maxims Relating to the Conduct of Human Life*, the Second Edition, London, 1693, 33.

¹⁴ Joseph Besse, *Collection of the Sufferings of the People Called Quakers*, Vol. 1, London, 1753, 104f.

¹⁵ Stephen A. Kent, Seven Thousand “Hand-Maids and Daughters of the Lord”. Lincolnshire and Cheshire Quaker Women’s Anti-Tithe Protests in Late Interregnum and Restoration England, in: *Women, Gender and Radical Religion in Early Modern Europe*, ed. by Sylvia Brown, Leiden, 2007, 65-67.

バンドの自覚をもって行動していたことである。

クエーカー最初の女性説教師とされるエリザベス・フートンはイングランドと北米大陸の両方を旅し、逮捕・投獄・管刑・追放刑をたびたび経験した。彼女が1667年にレスターシャーの「悪政」の改善を求めて宮内長官に送った書簡からは、クエーカーにあっては宗教的・内面的な関心と社会的な関心がわちがたく結びついていたことがよくわかる。

私の心からの願いは、あなた方が正義と正しい審判 (Justice & Judgement) を実行に移すことです。[・・・] 真の高貴さ (the true Nobility) は罪なき人びと (the Innocent) の叫びに耳を傾け、未亡人や父なき子らのために正義と正しい審判を下すことです。そしてあなた方自身が現世の悪に染まらないことです。これこそ不変かつ真実の高貴さなのです¹⁶。

クエーカーの社会貢献の場は当初イングランドやアイルランドなどに限られていたが、18世紀前半には北米も舞台のひとつになり、弾圧を受けるドイツの敬虔派やフランスのユグノーたちの救援活動も行われた¹⁷。クエーカーによる社会正義の追求は宗教の違いさえ超えていた。ジョージ・フォックスによれば白人・黒人・アメリカ先住民は神の前に霊的に平等であり、その自由意思は等しく尊重されねばならない。クエーカー信徒が奴隷所有と奴隷制自体の廃止を求める運動に深く関与した背景には、フォックスの時代に確立した人間観があった¹⁸。彼らは19世紀に「科学」の装いのもとに欧米世界を席卷する人種主義に惑わされることはなかった。

ところでクエーカーの男女はそれぞれ病人や囚人を見舞い、貧しい人たちに食料や衣服を提供する活動にいそしんだが、女性には男性が経験することのない困難があった。その多くは自律的な女性を敵視する為政者と主流派の教会指導者の圧力や介入によって生じたが、社会的活動を行うための「外出」の自由を女性に与えることを許さない家族や親族の妨害もしばしばであった。プロテスタントの一支流としてのクエーカーはカトリックの女子修道院のような閉鎖空間 (すなわち現世を離れた独身者の共同体) を認めないため、女性たちは家父長制的秩序の支配する社会のただ中で自

¹⁶ Emily Manner, *Elisabeth Hooton. First Quaker Woman Preacher*, London, 1914, 61. フートンについては西村裕美『子羊の戦い：17世紀クエーカー運動の宗教思想』(未来社1998年)、181、182頁を参照。

¹⁷ Cf. Helen E. Hatton, *The Largest Amount of Good: Quaker Relief in Ireland 1654-1921*, Kingston, 1993, 28. なお17世紀後半大西洋を渡ったクエーカーの伝道者のうち約3割が女性であったとベイコンは述べている (ベイコン、前掲書、45ページ)。じっさいの女性伝道者の数は18世紀を含めると1300人から1500人であり、単身者が多かったという。Cf. Amy M. Froide, *The Religious Lives of Singlewomen in the Anglo-Atlantic World. Quaker Missionaries, Protestant Nuns, and Covert Catholics*, in: *Women, Religion, and the Atlantic World (1600-1800)*, ed. by Daniella Kostroun & Lisa Vollendorf, Los Angeles, California, 2009, 61f.

¹⁸ Cf. George Fox, *Gospel, Family-Order, Being a Short Discourse Concerning, the Ordering of Families, Both of Whites, Blacks and Indians*, London, 1676 (Reprint: EEOB Editions, 2011). なおウィリアム・ペンのペンシルヴァニア植民地 (1681年設立) では奴隷所有が認められており、クエーカーの間でこれが正式に禁じられたのは1780年代のことである。フォックスの主張は絶対視されておらず、多くの問題で論争が起きていた。ベイコン、前掲書、103頁。

分たちの理想的な宗教生活と社会正義を同時に追い求めるしかなかった。それだけに風圧は大きかった。以下、その典型例を示そう。

2. アリス・ヘイズとエリザベス・アッシュブリッジ：家父長制への挑戦

クエーカー女性には独身者が比較的多く、伴侶を迎える場合も晩婚の傾向があった。家事や育児と宗教的・社会的活動の両立はしばしば困難であったからである。夫がクエーカーの場合、問題は起きにくかったが、主流派の教会に属する夫と家族がいながらクエーカーになった女性の場合はほぼ例外なく苦境に立たされた。そもそも近世のプロテスタント世界はカトリック世界以上に家父長制的であり、宗教改革者とその妻たちが家庭こそ女性の生きる場であるという教えを確立させていた。独身女性がともに暮らして祈りや読書、救貧や教育事業を行う女子修道院は全廃されて久しく、女性の生き方の選択肢は中世より狭くなっていた¹⁹。家庭婦人（良妻賢母）の規範からはずれる女性たちには過酷な運命が待ちうけていた。

17世紀後半（年代不詳）、ハートフォードシャーのアリス・ヘイズは国教会に属する夫ダニエル・スミス（農民）の反対を受けながらクエーカーの集会に通っていた。彼女は夫だけでなく義父母からもひどい仕打ちを受けた。義父は自分のことをアリスがクエーカー流の二人称すなわち目上の人に使う「あなたさま」(you)ではなく対等・平等な相手にもちいる「おまえさん／あんた」(thou)と呼ぶことに激怒し、クエーカーをやめなければ鎖を買ってきて外の木に縛りつけるぞと脅したり、離婚を要求したりした。夫も妻への「憎しみと軽蔑」を隠さず、妻が集会に出かけようとする、服を剥ぎとって外出を禁じるようなこともした。アリスはこうした仕打ちに耐えながら集会に出席しつづけ、夫の命令より「内なる光」に従うと主張しつづけた。すると夫はついに態度を一変させ、もとの優しい夫に戻り、子どもたちにも愛情を注いだという²⁰。これは彼女の短い自伝（1708年）に記されたことであり、読者の啓発を目的としてやや潤色されているかもしれないが、クエーカー女性が直面した困難の例証としての価値は高い。なおアリス・ヘイズは前述の教会税拒否運動にも関与しており、投獄や罰金刑、財産没収などを経験している。彼女はたんに自分の信仰を守ろうとただけでなく、貧しい人たちの利益と社会正義のために闘ったのである²¹。

チェシャー出身のエリザベス・サムソン（アッシュブリッジ）の場合は、夫の死まで妨害と虐待を受けつづけた。彼女は国教徒の外科医の家庭で育ったが、14歳のときに駆け落ちして父親の逆鱗にふれ、母親の手引きでダブリンの親戚の家に預けられた。そこで3年過ごしたあとエリザベスは1732年に大西洋横断の旅に出る。彼女はニューヨークで働く年季奉公人になる。職種はお針子であった。やがて彼女はサリヴァンという姓の巡回教師と結婚するが、彼は酒乱であり、次々に居

¹⁹ この点については踊共二「ジェンダー史からみた宗教改革急進派：スイス兄弟団・フッター派・メノナイト」『武蔵大学人文学会雑誌』53巻3・4号（2022年）、1～4頁を参照。

²⁰ A Short Account of Alice Hayes, A Minister of the Gospel, in the Society of Friends, in: *The Friends' Library*, Vol. 2, Philadelphia, 1838, 73-76.

²¹ Cf. Virginia Blain et al. ed., *The Feminist Companion to Literature in English: Woman Writers from the Middle Ages to the Present*, Yale University Press, 1990, 502.

所を変える癖があった。エリザベスはあちこちに移り住むなかで孤独に陥り、宗教に救いを求め、熱心に聖書を読むようになる。ロードアイランドでは土曜日に礼拝を行うセブンスデー・バプティストに興味を抱くが、けっきょく彼女はクエーカーに加わることにした。それはペンシルヴァニアやニュージャージーのクエーカー集会を体験してからのことである。エリザベスは夫も集会に出るように誘い、実現させたこともあったが、けっきょく夫はクエーカーを嫌い、エリザベスに脱会を求めた。ナイフで脅したり殴ったりすることもあった。この状態に終止符が打たれたのは、夫が兵役について命を落としたときであった。そのころエリザベスはすでに教師の職を得ており、自活することができた。彼女はその後ペンシルヴァニアのクエーカー教徒アーロン・アッシュブリッジと再婚し、一生涯クエーカーとして過ごした。彼女はプリーチャー（ミニスター）をつとめ、イングランドやアイルランドへ伝道旅行に出かけた。彼女は当然、クエーカーの女性リーダーとして救貧事業にも関わった²²。

エリザベスは女性の声を社会に広く届けようとするクエーカーの方針に従い、アリス・ヘイズと同じように短い自伝を刊行するが、それは彼女の内面をよく伝えるエゴドキュメントである。エリザベスは少女時代に受けた宗教教育によって貧しい人たちに寄り添うことが神意にかなうことだと素朴に信じていたという。彼女の自伝には次のように書いてある。

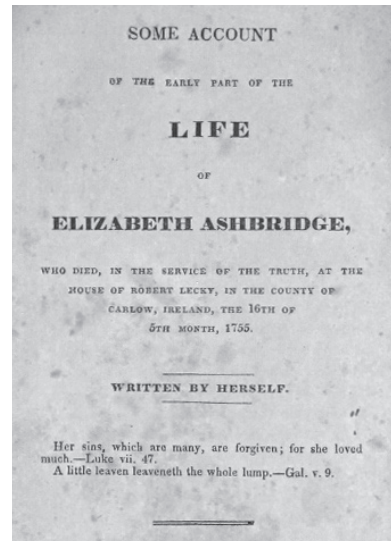


写真2 エリザベス・アッシュブリッジの自伝（1755年）

また私は貧しい人々への共感の気持ちを強くもち、彼らが主に愛される人たちだと読み聞かされたことを覚えていました。それは現世の持ち物に関して貧しいという意味です。私はそうした人たちの小屋をしばしば訪ねましたが、私などより彼らのほうが満たされていると感じていました。それでも私は、彼らに贈ることのできるお金や品物があるときはそれを捧げました。そうした人たちに為すことは主に対して為すことだということを思い起こしながら²³。

²² Cf. Anette Laing, *Crossing Denominational Boundaries. Two Early American Women and Religion in the Atlantic World*, in: *Women and Religion in the Atlantic Age, 1550-1900*, ed. by Emily Clark & Mary Laven, Burlington, Vermont, 2013, 102-121. See also Sheila Wright, op. cit., 107-109.

²³ "I had also great tenderness for the poor, remembering that I had read they were beloved of the Lord. This I supposed to mean such as were poor in temporal things; whom I often visited in their cottages, and used to think that they were better off than myself; yet, if I had money, or any thing suitable for a gift, I bestowed it on them, recollecting that they who gave to such, lent unto the Lord". Elizabeth Ashbridge, *Some Account of the Early Part of the Life of Elizabeth Ashbridge: Who Died, in the Truth's Service, at the House of Robert Lecky, in the County of Carlow, Ireland, the 16th of 9th Month, 1775* (Reprint: Sacramento, California, 2021), 4.

ここでエリザベスが念頭に置いているのは、貧しい隣人に仕えること（具体的には飢え渴いている人に飲食を与え、旅人に宿を貸し、裸の人に衣服を着せ、病人や囚人を見舞うこと）はすなわちキリスト自身に仕えることだというマタイ福音書 25 章の教えであり、それ自体は教派を問わない性格のものであるが、彼女はやがてクエーカーの活動のなかにそのもっとも徹底した実践例をみいだすのである。

前述のように彼女には近所の若い男性と駆け落ちした経験があり、自伝ではそれを「愚かしい情熱」の為せる業であったと総括しているが、彼女はこの青年を「最愛の人」(darling of my heart)と呼んでおり、二人の逃避行はかならずしも一時の気の迷いではなかったことがわかる²⁴。この若者は貧しい靴下編みであり、しかもその時点では仕事を奪われていたというから、エリザベスの行動にはある種の信念が働いていたと推測される。この青年は数か月で死亡しているが、そうでなければ彼女の人生は変わっていたかもしれない。いずれにしても、クエーカーになってからのエリザベスの生き方は、他者のために、とりわけ弱者のために尽すサーバンドリーダーとしてのそれであった。

3. ルクレシア・モット：奴隷制反対運動に捧げた生涯

クエーカー派が黒人奴隷制に異議を唱えた歴史は古い。それはジョージ・フォックスがバルバドス島を訪れ、動物のように酷使される奴隷たちを目の当たりにして抗議した 1671 年に始まる。フォックスの主張の力点は白人も黒人もアメリカ先住民もキリストを信じて救われるという万人救済の可能性にあり、彼は奴隷制を即座に廃止すべきとは主張しなかったが、キリスト教徒の奴隷所有を宗教的・倫理的な地平で強く非難した意義は大きい²⁵。1688 年には、ペンシルヴァニア植民地の新しい町ジャーマンタウン（フィラデルフィア近郊）のクエーカー集会において奴隷制に反対する文書（請願書）が作成された。この文書は黒人には白人と等しい権利があると記されている。それは 1683 年に「ドイツ人のメイフラワー」と呼ばれるコンコード号でドイツから移民してきた一団（敬虔派・メノナイト・クエーカー）のリーダー、フランツ・ダニエル・パストリウス（ルター派の敬虔主義者・弁護士）らが起草したものである。彼らの主張がどの程度の影響力をもったかは不明だが、これは奴隷制を非難した最初の歴史的な文書とされている。パストリウスらは「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなた方も人にしなさい」というマタイ福音書 7 章 12 節のキリストの教え（いわゆる黄金律）を引き、その教えは「世代や生まれや肌の色とは無関係であり、他人に対して盗みをはたらく者たちと他人を売り買いする者たちは同類ではないか」と指摘している²⁶。

²⁴ *Ibid.*, 5.

²⁵ Cf. Kathleen M. Brown, *Undoing Slavery. Bodies, Race, and Rights in the Age of Abolition*, Philadelphia, Pennsylvania, 2023, 32-34.

²⁶ “There is a saying that we shall doe to all men licke as we will be done ourselves; macking no difference of what generation, descent or Colour they are. and those who steal or robb men, and those who buy or purchase them, are they not all alike.” Quaker Protest Against Slavery in the New World, Germantown, Pa., 1688 (Haverford College Quaker and Special Collections).

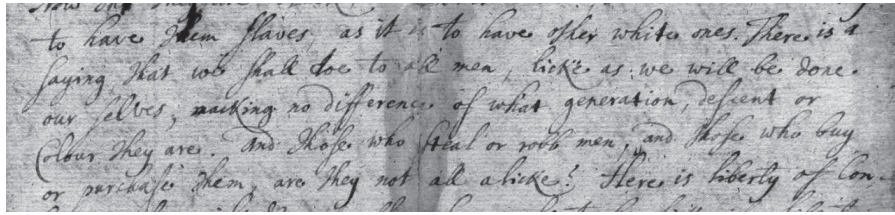


写真3 ジャーマンタウンの奴隷制反対文書（1688年）。出典は註26に記してある

その後クエーカーの奴隷所有者（富裕層）を集会から除名する動きが進み、1780年代には彼らのあいだに奴隷所有者はいなくなる²⁷。アメリカの奴隷制そのものの廃止のために行動したクエーカー教徒もおり、この領域では女性たちの活躍も著しかった。

本稿では18世紀末に生まれ、19世紀に活躍した女性リーダー、ルクレシア・モットに注目したい（彼女が生きた時代は近代だが、とりくんだ問題の根は前時代にあるから、本稿の考察対象に加えることにしたい）。ルクレシアはマサチューセッツ州の生まれで、13歳のときにニューヨーク州のクエーカーの寄宿学校ナイン・パートナーズに入学し、卒業後にそこで教師の職を得た。この学校で彼女は、女性教師の給与が男性教師より低いことを知り、男女平等のはずのクエーカーの組織にも女性差別があることがわかって愕然とする。このときからルクレシアの長い闘いが始まる。彼女は女性の地位の向上のための活動に加え、奴隷制廃止運動にも深く関与した。フィラデルフィアで結婚した夫ジェームズの影響もあった。ルクレシアは1821年にクエーカーのミニスターの資格を得て各地の集会で説教を行うが、それは人種差別と奴隷制の悪を告発する機会にもなった。夫ジェームズはアメリカ奴隷制反対協会の設立にかかわり、妻ルクレシアはフィラデルフィア女性奴隷制反対協会を設立して言論と実践のリーダーシップを担った。集会所が暴徒によって襲われ、放火されて灰燼に帰す経験をしながら、彼女は粘り強く運動をつづけ、1840年にはロンドンで奴隷制反対世界会議に参加するなど、活動の幅を広げていった²⁸。彼女は70歳になった年にリンカンの奴隷解放宣言（1863年）の知らせに接してようやく達成感を味わうことができたが、それは彼女自身のような運動家たちの努力がなければ実現しなかったことである²⁹。クエーカーの集会所や公共のホールでのルクレシアの説教や演説には説得力と迫力があり、それらは多くの聴衆の心を動かした。ひとつだけ、1849年12月のスピーチを引用しておきたい。やや長いが、彼女の議論の展開の特徴がわかるように、可能なかぎり省略しないかたちをとりたい。

ああ、人間を縛りつける鎖！ これを目の当たりにして恥をおぼえ、うつむかない人はいないは

²⁷ Randall M. Miller & John D. Smith, eds., *Dictionary of Afro-American Slavery*, Westport, Connecticut, 1997, 2.

²⁸ 武田貴子ほか『アメリカ・フェミニズムのバイオニアたち：植民地時代から1920年代まで』（彩流社2001年）、109～114頁。

²⁹ Carol Faulkner, *Lucretia Mott's Heresy. Abolition and Women's Rights in Nineteenth-Century America*, Philadelphia, Pennsylvania, 2011, 180.

ずです。嘆かわしいのは、彼らが安息日を守りながら翌日には競売所の台のうえで同じ人間が売られ、最高入札者のものになる制度を容認していることです。私たちは、人間を財産として所有する権利があるという非道なる主張に反対する声をあげるべきです。最悪なのは、この制度は聖書によって認められているという意見が聞かれることです。これは聖書の最大の曲解なのですが、牧師たちは不適切にも奴隷制に好都合な箇所をみつけるために聖書のページをめくっています。「災いだ、同胞をただで働かせ賃金を払わない者は」。この箇所〔エレミヤ書 22 章 13 節〕こそ、私たちは引用すべきです。そして私たちはみな、私たちの兄弟たちの流す血に責任を負っています。この犯罪は国民全体のものなのです。私たちはみな、それに巻き込まれているのです。どうやって私たちは、私たちにまわりつき、そして私たちが支持してしまっているこれらすべての大きな誤りと悪を放置しながら、神の子への信仰をもちつけ、表明することができるでしょうか。私たちはその悪と無関係なのでしょうか。いいえ、だれもが責任を負っています。私たちは、どのような形のものであれ、どのように表れるものであれ、罪に反対する証言を行うべく召されています。私たちはどのようにその罪に加担しているのでしょうか。それは奴隷の重労働で生みだされた実りの恩恵を受けることによってです。私たちの衣服には奴隷の血が染みこんでいるのです。[・・・] 私たちの眼前にあるのは奴隷制を執拗に維持する民主的かつ共和的なアメリカです。そしてこのアメリカは文明世界における奴隷制の罪の最後の砦なのです³⁰。



写真4 ルクレシア・モットの肖像写真
F. Gutekunst, ca.1870 (United States Library of Congress)

³⁰ “Ah! the chains of human bondage! They should make everyone to blush and hang his head. Mournful is it that they should countenance the Sabbath day, and then, to-morrow, recognize a system by which their fellow-men are sold at the auction-block to the highest bidder. We should bear our testimony against the nefarious claim of the right to property in man ; and the worst of this is, that we should hear this institution claimed as sanctioned by the Bible. It is the grossest perversion of the Bible, and yet many ministers have thus turned over its pages un-worthily, to find testimonies in favor of slavery. "Wo unto him that useth his neighbor's service without wages, and giveth him not for his work". This is what we should quote. And we are all guilty of the blood of our brother. The crime is national. We are all involved in it ; and how can we go forth and profess to believe the faith of the Son of God, with all these great wrongs and evils clinging to us, and we upholding them? Have we nothing to do with it? Every one has a responsibility in it. We are called to bear our testimony against sin, of whatever form, in whatever way presented. And how are we doing it? By partaking of the fruits of the slave's toil. Our garments are all stained with the blood of the slave. [...] We find democratic, republican America clinging to slavery ; and it will be found the last stronghold of sin in the civilized world.” Anna D. Hallowell, ed., *James and Lucretia Mott. Life and Letters*, Boston, 517f.

ルクレシア・モットは宗教家であるが、彼女が求めていたのは教会や信徒の内面の改革だけではない。その議論はキリスト教信仰と聖書を主題にしながら国民および国家のあり方に及んでおり、彼女は最終的にアメリカ合衆国を真に民主的な共和国にするための政治と経済の根本的な変革を呼びかけているのである。この姿勢は一貫しており、彼女は逃亡奴隷を助けて自由州ペンシルヴェニアやカナダに連れていく「地下鉄道」(Underground Railroad)の活動に「駅」(station)を運営するかたちで携わり、「黒人のモーセ」と呼ばれた活動家ハリエット・タブマンに協力していた。毎年救助される逃亡奴隷の数より奴隷として生まれる黒人の子どもたちのほうがはるかに多いのだから奴隷制それ自体を「根絶」しなければ何の解決にもならないというのがルクレシアの持論であった³¹。

ルクレシア・モットは強い意志と信念をもった指導者であり、統率力のある「ビジョン型」のリーダーにみえる。奴隷制に反対する団体が男性だけで組織され、そこに女性たちが参加することの「是非」が議論になった時代に女性差別と人種差別の克服を唱えるには明確な「ビジョン」ないし未来像を示す必要があったから、それも当然であろう。しかし彼女は政治的運動の先頭に立っていただけではない。クエーカー女性の多くがそうであったように、目立たないかたちの救貧事業にも携わっていた。とくに力を入れたのはフィラデルフィアの貧困層(とりわけ女性たち)のために生活資金と雇用の機会を提供する地道な活動である³²。伝統的な寡婦・孤児の支援とは異なる新しい時代の女性労働者たちがおもな支援対象であった。いずれにしても、ルクレシア・モットはつねに弱者に寄り添うクエーカーらしいサーバントリーダーでもあった。

おわりに

本稿ではグリーンリーフのサーバントリーダーシップ論の歴史的ルーツをジョージ・フォックスやウィリアム・ベン思想およびクエーカーの女性リーダーたちの事例に求め、彼女たちが何をしていたか、どのようなリーダーであったかを論じてみたが、そこから現代のリーダーシップ論にどのようなフィードバックが可能であろうか。結論をいえば、現代のリーダーシップ論の大半は特定組織の内部における「リーダーとフォロワー」の関係を軸にした考察である一方、近世クエーカー史に登場するリーダーたちは自分たちの属する教派内の指導者・奉仕者であっただけでなく、外部の人びと、とりわけ社会的弱者に仕え、地域社会や国家全体に対して彼らの生存の権利、人間の尊厳、そして自由と平等の実現のための変革を求めるオピニオンリーダーでもあった。グリーンリーフが「社会でもっとも恵まれない人の利益」の増進を「公正さの理論」に従って追求する人こそ理想のサーバントにしてリーダーだと述べる時、彼が歴史上のクエーカーのサーバントリーダーたちの群像を意識していたのは確実である。

³¹ Cf. Shirley J. Yee, *Black Women Abolitionists. A Study in Activism, 1828-1860*, Knoxville, Tennessee, 1993, 99. タブマンについてはキャサリン・クリントン『自由への道：逃亡奴隷ハリエット・タブマンの生涯』廣瀬典生訳(見洋書房 2019年)に詳しい。なおルクレシア・モットとハリエット・タブマンは女性参政権運動においても協力関係にあった。上杉忍『ハリエット・タブマン：「モーセ」と呼ばれた黒人女性』(新曜社 2019年)、239頁。

³² Faulkner, *op. cit.*, 243.

上述のような社会的リーダーシップはビジネスの世界と無縁であると考えてはならない。企業の社会的責任と社会貢献が重視され、そうした取り組みが企業自体の評価を高める時代だからである。したがって、組織内の運営の問題に関心を集中させるリーダーシップ論には限界があるといわざるをえない。「新入世」のいま、人間の利己的な「欲望」や「欲動」の観点で資本主義を論じ、その結末に自己破壊（死）をみる議論が流行しているが、いわゆる「共同体感覚」や他者への奉仕が「自己肯定感」を育む心理的メカニズムも知られており、自己の満足と充足を求める欲望（利己主義）と奉仕の精神（利他主義）を二項対立的にとらえるべきではない³³。そうであるなら、グリーンリーフ的・クエーカー的なサーバントリーダーシップを非現実的とみなすのは適切な判断ではないであろう。いずれにしても、組織の外側の広い社会を意識したサーバントリーダーシップ論には、その歴史的（文化的・宗教的）ルーツの考察も含めて、いっそうの研究と応用の価値があろう³⁴。

なお本稿では果たせなかったが、サーバントリーダーシップであろうとそうでなかろうと、「反対者」「犠牲者」の存在に関する慎重な検討も必要である。ハイフェッツはコネチカット州南部の町でホームレスと身体障害者の施設を建設する計画が（不動産価値の下落や子どもの安全への影響を懸念する）一部の近隣住民の反対で頓挫した例をあげ、反対派とのコミュニケーションの重要性を説いているが、最終的には変革に適應できない「犠牲者」が出ることを容認する覚悟がリーダーには必要であると主張している³⁵。サーバントリーダーシップ論においては「説得」が重視される。このこと自体に異論を唱える人はだれもないであろう。しかし場合によっては、最後まで反対を貫く人たちがどう向き合うかが問題になる。権限の行使による決定か、下からの実力行使か、利害関係者による多数決か、それとも全会一致か（つまりひとりも反対者がいなくなるまで何もしないか）、選択肢は多くはない。ただし、この選択を急ぐか先延ばしするかは、当事者たちの意識と判断によるであろう。クエーカーのジョン・ウールマンは自派の構成員たちに奴隷所有を断念させるまで30年の歳月を費やして説得を行ったが、その間つねに、ものいう道具に対する裕福な信徒仲間の「所有権」を尊重していた。一方、ルクレシア・モットやハリエット・タブマンは違法な実力行使によって奴隷の自己解放（逃亡）を助けた。そもそも彼女たちは連邦議会が決めた法律（具体的には1793年と1850年の逃亡奴隷法）を認めていなかったのである。それが国民の代表者たちによって多数決で定められたものであっても、である。

³³ ジル・ドスタレール、ベルナル・マリス『資本主義と死の欲動：フロイトとケインズ』齊藤日出治訳（藤原書店2017年）、マルクス・ガブリエルほか『資本主義と危機：世界の知識人からの警告』（岩波書店2021年）、アルフレッド・アドラー『人生の意味の心理学』岸見一郎訳（アルテ・新装版2021年）などを参照。

³⁴ Barbara Jones Dension, ed., *Women, Religion, and Leadership. Female Saints as Unexpected Leaders*, New York, 2019 所収の Jessica Huhn, Kateri Takakwitha (1656-1680). *She Who Bumps into Things and the Power of Servant Leadership* はモホーク・バレー（現在ニューヨーク州）のアメ리카先住民女性のキリスト教受容（17世紀後半）のあり方にサーバントリーダーシップ論を適用しようとしているが、キリスト教の受容から実践への移行に関する検証が不十分である。

³⁵ ロナルド・A・ハイフェッツ、マーティ・リンスキー『最前線のリーダーシップ：何が生死を分けるのか』野津智子訳（英治出版2018年）、145～148、164～167頁。

